

うぶね[鶴舟] 2018年8月発行

岐阜大学医学部附属病院広報誌

Vol.37

Gifu University Hospital

うぶね



特集

小児科科長 深尾 敏幸

スタッフ紹介

ドクターカーナース 白木 大輔

トピックス

ナース・オブ・ザ・イヤー授賞式

うぶねダイアリー

フォーラム がんと生きるなど



今回の表紙は小児科の皆さんです!



臨床なくして 研究・教育なし

ふかおとしゆき
岐阜大学医学部附属病院 小児科科長 深尾 敏幸

PROFILE

岐阜大学大学院医学系研究科小児病態学分野教授
岐阜大学医学部附属病院小児科科長
岐阜大学医学部附属病院新生児集中治療部部長
岐阜大学医学部附属病院遺伝子診療部部長

1985年／三重大学医学部医学科卒業
1989年／岐阜大学大学院医学研究科博士課程内科系
小児科学専攻修了医学博士
1989年／岐阜大学医学部附属病院医員小児科
1993年／県立岐阜病院新生児科医長
1993年／岐阜大学医学部附属病院助手
2000年／オーストラリアクィーンズランド医学研究所
2002年／岐阜大学医学部附属病院講師
2004年／岐阜大学医学部小児病態学助教授
2007年／岐阜大学大学院連合創薬医療情報研究科教授
2013年／岐阜大学大学院医学系研究科小児病態学教授

資格／小児科専門医、指導医
アレルギー専門医、指導医〔小児科〕
臨床遺伝専門医、指導医

小児科は、小児の総合診療医であるとともに、診療領域は幅広く1診療科に多くの専門性を要求される科でもあります。診療領域として、新生児、神経、血液・腫瘍、アレルギー、遺伝、先天代謝、腎臓、内分泌、感染症、呼吸器、栄養消化器、肝臓、心身症、リウマチ自己炎症免疫、循環器など多くの領域があります。岐阜大学附属病院では循環器を除くほとんどの領域の専門領域に対応しています。特に先天代謝異常症では岐阜県の新生児マススクリーニングではメインコンサルタントに指定されており、稀な疾患も多いですので、専門領域として県内外からの患者さんに対応しています。今回はいくつかの専門領域からリウマチ自己炎症免疫、アレルギー、神経、血液・腫瘍、についてご紹介いたします。

免疫・自己炎症疾患診療



大西 秀典 先生

担当／原発性免疫不全症、自己炎症疾患、膠原病、神経

免疫不全・膠原病グループでは、感染症に罹患しやすい(易感染性)、原因不明の発熱を繰り返す、長引く関節炎などの症状を示す小児、すなわち免疫不全症、自己炎症性疾患、膠原病・リウマチ性疾患の診断治療を行っています。当科は日本免疫不全・自己炎症学会(JSIAD)の理事施設のひとつであり、原発性免疫不全症、自己炎症性疾患の遺伝子検査を利用することが可能となっています。また岐阜県下唯一の小児リウマチ学会によって登録された小児リウマチ中核施設でもあります。症状、いままでの経過、ご家族の病歴、様々な臨床検査、遺伝子検査を組み合わせることで、正確な診断を行うことができます。その情報を基に適切な治療を行っています。当施設ではガンマグロブリン補充療法、分子標的治療(抗TNF- α 療法や抗IL-1 β 療法など)を受けることが可能です。また免疫不全症が疑われる場合、医療施設によっては予防接種を受けることができないことがあります。当科では正確な診断に基づき適切な予防接種スケジュールの指導も行なっています。

アレルギー診療



川本 典生 先生

担当／アレルギー、免疫、新生児

アレルギーグループは岐阜大学小児科のアレルギー診療の伝統を引き継ぎ、標準的な診療に加えて、難治例への的確な診断や治療の挑戦に努めています。食物アレルギーについては、食物経口負荷試験を行って、食べることができる量を確認しながら積極的に経口摂取を進めています。また、食物依存性運動誘発アナフィラキシーの診療も行っています。また、小児のアトピー性皮膚炎の軟膏塗布の指導を行ったり、重症例では必要に応じて教育入院も含めた診療を行ったりしています。さらに、気管支喘息についても、呼吸機能検査や呼気NO検査などを適切に取り入れて、病状のコントロールに努めるとともに、必要な症例には、気道過敏性試験などの検査にも対応をしています。

平成30年度に岐阜大学医学部附属病院が岐阜県のアレルギー拠点病院に選出されました。小児科のアレルギーグループもアレルギー疾患の診療、教育、研究など、拠点病院の業務に積極的に協力していきます。

神経疾患診療



久保田 一生 先生

担当／神経、免疫、新生児、血液・腫瘍

神経グループでは脳、神経や筋肉に異常がある小児の診断治療を行っています。脳、神経や筋肉の病気は、けいれんした、意識がおかしい、発達が遅い、歩き方がおかしい、手足の力が入らない、落ち着きがないなどの症状があるときに疑います。当科では小児神経専門医が5人在籍し、幅広い小児神経の疾患領域に対応しています。診断するには、今までどういことが起きたのかをしっかりと確認することが重要です。

外来ではまず、これまでの経過、ご家族のこと、生まれたときや発達の様子など十分にお話を伺います。その上で神経学的診察を行い、血液検査、CTやMRI検査、発達検査、脳波検査などを進めていきます。これらの診察と検査で正確な診断をつけて治療や指導を行うことを心掛けています。また、さまざまな症状を持つ重症心身障害児・者もみえています。それぞれの状態にあわせた呼吸や栄養管理、気管カニューレや胃瘻交換などの医療ケアも行っています。

血液・腫瘍疾患診療



小関 道夫 先生

担当／血液・腫瘍

本グループは主に小児期に起こった白血病や脳腫瘍、神経芽腫などの「小児がん」や貧血、血友病などの「血液疾患」を専門に診療しています。わが国では年間2,000~2,500人の子ども(約10,000人に1人)が小児がんと診断されており、決して頻度は高くありませんが、本人、ご家族の受けるショックは、計り知れないものです。我々は常に治癒を目指し、患者さん、ご家族に寄り添い、元の生活に戻れるよう全力で取り組んでいます。

小児がんは成人のがんに比べて治療に対する効果が高く、ここ数十年の医療の進歩で、現在では70~80%が治るようになってきました。しかし子どもは発育途中にあるため、治療の合併症が何年も経ってから現れることもあります。そのため治った後も定期的に受診して頂き、無事成人を迎えられるように、様々なサポートを行っています。

また小児がん以外にも血管腫やリンパ管腫の研究や治験も積極的に行っており、日本中から患者さんが集まっています。

クローズアップスタッフ vol.11

時間との戦いの中で 最良の判断を

岐阜大学医学部附属病院
高度救命救急センター 副看護師長
小児救急看護認定看護師

白木 大輔

ドクターカーナーズとは…
ドクターカーを活用し病院前救護において
看護実践する看護師です。生命を守るため
にできるだけ早く医療を開始する事を目的
に医師と共に活動しています。



ドクターカーナーズになる方法

ドクターカーナーズになるには、まず救命センターにいる患者さん全てに適切な看護を実践する事が求められます。救命センターには年齢・疾患・症状を問わず患者さんが入室します。そこで、それぞれに応じた治療方針や必要な看護を理解する力を養います。救命センターでの看護実践ができると次に救急外来で救急看護を学びます。そこで一刻を争う患者さんやその家族への対応力を学び、さらにどのような状況でも冷静に対応するスキルを身に付けます。救急外来での看護実践ができて初めてドクターカーナーズの選考基準となり、当院のドクターカーワーキンググループにおけるドクターカー搭乗基準に準じるとドクターカーナーズになることができます。

ドクターカーナーズの仕事内容

ドクターカーナーズの仕事は、119番通報から現場到着までの情報収集、医師の診療の補助、例えば点滴や挿管の介助等、活動した全ての記録、患者や家族の心のケア、病院到着後の申し送り等です。ドクターカーは現場まで緊急走行しますので、危険を伴います。そのため、安全確認も重要な任務となります。また、ドクターカー専用の物品や薬剤の管理も仕事の一環です。

VOICE ドクターカーナーズと連携することで、
よりの確に救命処置ができるようになりました。



左：小森 勝 / 中央：白木大輔 / 右：三宅喬人

岐阜市消防本部
岐阜南消防署 救急救命士 小森 勝

はじめてドクターカーで出動した際、医師、看護師、救急隊員の見事な連携がとても印象に残っています。それは、今まで顔の見えなかった医師や看護師が常駐することで、コミュニケーションがとれるようになったからだと思っています。

患者さんを現場から病院へ搬送するまでに時間がかかりますが、医師と看護師がいち早く現場へかけつけることで「助からなかった命が助かるようになった」ことはとても大きいです。これからも信頼をもって仕事ができる「顔の見える関係」でありたいです。



ドクターカーナーズ 出動までの流れ

01



緊急時に備えます

消防本部にて119番通報を待ちます。

03



要請の確認

119番通報があれば指令室へ移動し、通報内容を一緒に聞きます。

05



出動の準備

ドクターカーへ向かいます。

07



出動



機材の確認

医師とともに医療資機材をチェックします。

02



デスクワークなど

119番通報がなければ作戦会議室でその他の仕事を行っています。

04



出動要請

指令員が通報内容から出動と判断した場合、要請がかかります。

06



緊急出動

医療資機材を持ちドクターカーへ乗り込み、消防職員の緊急走行で現場に向かいます。

現場での処置

消防署の救急隊員と協働して最善の処置を行います。



ドクターカーナーズとして大切なこと

ドクターカーナーズとして大切なことは、まずコミュニケーション能力です。これは、緊迫した状態で患者さんやその家族とコミュニケーションするだけでなく、ドクターカーは消防署の救急隊員との協働となりますし、時には警察官等様々な職種の人と関わりを持つので、常に冷静にコミュニケーションを図るようにしています。また、少ない情報から最悪を予測し、さらに限られた医療資機材で患者さんへの対応が求められるため、救急看護に対する自己研鑽は欠かせません。色々大変な事は多いですが、患者さんや家族から感謝の言葉を頂くとやっていると良かったと実感します。病院に来る前から患者さんに関わるため継続看護に繋がられる事もドクターカーナーズとしてのやりがいだと思っています。



高度救命救急センター 看護師長 杉原 博子

ドクターカーナーズに考えて欲しいことは、看護師が同乗することの意味です。緊迫した状況や処置の中で、対象者である患者さんや家族の代弁者となるべく、その人に思いを馳せ「人を見る」ことが出来るのは看護師です。医療者側だけでなく、対象者側に立つて考えることが出来る看護師を育てていきたいですね。白木さんは小児救急看護認定看護師でもあるので、小児から高齢者まで幅広く看れる細やかさを、是非後輩に伝えていって欲しいです。



仲間とバーベキュー

ナース・オブ・ザ・イヤー授賞式



『ナース・オブ・ザ・イヤー 今年最も輝いた看護職員』は、表彰を開始して本年度12年目を迎えました。この賞は、前年度1年間看護師が看護活動の様々な分野で人一倍頑張り、病院や患者さんの看護に貢献したことを同僚に認められ、さらに看護部内で審議し、選考されるものです。



Nurse of the Year 2018



今回は4名の看護師が選ばれました。いずれの看護師も当看護部ではリーダーシップを発揮する中堅看護師であり、部署の教育や課題解決に取り組み成果のあった看護師達です。決して一人で成しえたわけではありませんが、4人のリーダーシップは非常に重要であったと思います。今後も、この賞を励みに、さらに頑張ってくれることを期待しています。



NURSE 高度救命治療センター 井戸田 夏季 *Natsuki Idota*

このような賞に選んでいただき、大変光栄な気持ちです。看護師としても、人間としてもまだまだ未熟な私が、このような賞を頂けたのは、高度救命救急センター看護師長をはじめ、沢山の尊敬する先輩方、一緒に頑張ってきた同期や後輩、そして患者さんといった多くの方々にお世話になり教えて頂いた事のおかげだと心から感じています。感謝の気持ちでいっぱいです。今後もこの賞を頂けた事に対する光栄な気持ち、関わってくださる周囲への感謝の気持ちを大切に、日々の学びを積み重ね、成長していきたいと思っています。本当にありがとうございました。



NURSE 東8階 吉村 尚子 *Naoko Yoshimura*

今回このような素晴らしい賞を頂きましてありがとうございました。たくさんのご指導とサポートをしてくださった管理者の方々、病棟スタッフにとっても感謝しています。昨年度は、アドバンス・ケア・プランニングを用いた看護に取り組みました。患者さんの価値観や人生において大切にしていることが尊重された看護、入院という一時点ではなく、その後の療養生活にも活かされる切れ目ない看護ケアの実践について学びを深めることができました。患者さんのために看護師としてできることを探求する中で、自分の看護観を見つめ直す機会にもなりました。今後も心のこもった温かい看護を目指し日々努力していきたいと思っています。



NURSE 東5階 大江 万紀子 *Makiko Oe*

この賞が頂けたのは、自分の力だけでなく、何よりも上司や東5階のスタッフが協力して、夜勤始業前労働削減に向けた取り組みや物品管理の取り組みを行ってくれたおかげであると実感しています。「リーダーのあり方」の研修を通して私は、よきリーダーシップを発揮するためには業務遂行能力（職位にふさわしい看護技術や知識）と、リーダー感覚（人を動かす力）が大切であると学びました。今後も第一は患者さんのために、そして自分たちにとっても働きやすい環境づくりを目指し、様々なリーダーレベルの看護師を巻き込みながら、スタッフみんなで日々精進していきたいと思っています。



NURSE 西9階 和田 称子 *Shoko Wada*

今回の受賞の知らせを聞いた時、「私なんて…」と恐縮する反面、自身の活動を見守ってくださる方がいることを嬉しく思いました。そしてこれからの自身の行動に、今まで以上に責任を持ち、周りで支えてくださる方々に感謝の気持ちを忘れず自身の看護を邁進していきたいと思っています。昨年度は実地指導者、退院調整係としてスタッフの指導や部署の基準の見直しを行いました。部署異動したばかりで、スタッフと一緒に勉強しながらの係活動でした。これからも周りの方々と共に成長していきたいと思っています。ありがとうございました。

※アドバンス・ケア・プランニング(今後の治療・療養について患者・家族と医療従事者があらかじめ話し合う自発的なプロセス)

第1回 親子イベントを開催しました

6月24日



男性の育児を支援するNPO法人「ファザーリングジャパン」の榊原輝重さん(49)による講演会を開催しました。講演会には、約60名の参加があり、結婚・出産で退職することなく、働き続ける看護師が増えてきた現代において、仕事・育児・家事の両立にはパートナーの理解と協力が不可欠であると話されました。

ママさん看護師と子ども達には、子どもジャズバンドの「プチジャズ」によるコンサートを企画しました。大人は約50名、子どもは90名の参加がありました。子どもたちはお菓子やポップコーン等のおみやげをもらい、「アンパンマンのマーチ」など大好きなアニメソングを聞いて楽しみました。



フォーラム「がんと生きる」～こころとからだ 私らしく～

7月1日



岐阜市民会館で開催され449名の方が参加されました。当院からは吉田病院長が出演し、がんの新しい治療法や薬が生まれている一方で、患者は治療による副作用や、治療と仕事の両立などで様々な悩みを抱えており、患者一人一人に合った治療とケアをどう考えていくべきかなど、がんとともに生きる当事者や医療者らが語り合いました。

また、岐阜県がん診療連携拠点病院協議会患者相談専門部会のがん相談員による「がん相談コーナー」を設け、ポスターやチラシなどの展示も行いました。実際に相談された方は20名、展示物に興味を持たれる方など多くの方にお立ち寄りいただきました。



第12回 多数傷病者受入訓練

7月13日



今年度も病院内アトリウム全体を使用し、本院の基幹災害拠点病院としての対応能力の向上を目的として多数傷病者受入訓練を実施しました。

当日は、医学科4年生が医師役、傷病者役、家族役、報道役として参加し、医療チームの立ち上げから記者会見まで、一連の模擬治療活動を行いました。また、薬剤部、放射線部の参加もあり、多職種連携を見据えた今後の訓練のあり方を考える良い訓練となりました。

当院は、今後も災害時に備えた実地訓練を重ね、地域の皆さんが安全・安心に過ごせるよう努めてまいります。



文部科学省 眞鍋企画官による講演会

7月17日



医学部記念会館において、文部科学省高等教育局医学教育課 眞鍋企画官による「医療政策の動向について」と題した講演会を開催しました。講演会には、吉田和弘病院長をはじめとする教職員およそ200名が参加しました。

講演内容は、日本の医療政策の歴史から、今後都道府県や病院が目指していくべき姿、医師の働き方改革など、多岐にわたり、参加者は医療政策について理解を深める良い機会となりました。

